

氏 名 おお かわ いさむ 大 川 勇
 学位(専攻分野) 博 士 (文 学)
 学 位 記 番 号 論 文 博 第 393 号
 学位授与の日付 平 成 12 年 3 月 23 日
 学位授与の要件 学 位 規 則 第 4 条 第 2 項 該 当
 学位論文題目 ムーヅルの可能性感覚
 —— 中欧におけるその精神史的系譜 ——

論文調査委員 (主 査) 教 授 山 口 知 三 教 授 藺 田 坦 助教授 松 村 朋 彦

論 文 内 容 の 要 旨

20 世紀のドイツ語文学を代表する作家のひとりであるローベルト・ムーヅルの作品世界が「ユートピア的なもの」の刻印を受けていることは、よく知られている。とりわけかれの未完の大作『特性のない男』(1930/32) は、ユートピア的思惟の放つ強い詩的暗示力を秘めた小説であるといわれ、それゆえムーヅルは広義のユートピア文学の系譜にその名を連ねてみいるが、そのムーヅルのユートピア的思惟の基底にあるのが「可能性感覚」(Möglichkeitssinn) である。可能性感覚とは、現にあるものを別様でもありうるものと見なし、現実世界の背後に可能性として潜在する無数の世界を呼び起こすことによって、現実という固定した枠組みからの超出を促す意識感覚ないし思考能力のことである。現実感覚の対極に位置するこの可能性感覚を持つことによって、『特性のない男』の主人公ウルリヒはさまざまなユートピアの探求者となり、また、社会の座標上に自分の位置を確定することを拒む「特性のない男」(Mann ohne Eigenschaften) となる。この「特性のない男」の持ついわば唯一の特性である可能性感覚は、その意味で、小説『特性のない男』を支える礎石的役割を果たしていると言えることができるし、じつ、ムーヅル文学における可能性感覚の重要さはすでに研究者の共通認識にもなっている。しかしながら、可能性感覚をめぐる従来の研究は、そのほとんどが作品内在的解釈か個別的比較研究のレベルにとどまっており、これを広く精神史の文脈に位置づける試みはまだ行われていない。

7 章から成る本論文は、ムーヅルの可能性感覚が生みだされる背景にどのような精神史的水脈があったのかを探り、主として中欧(ドイツ/オーストリア)におけるその精神史的系譜のなかに可能性感覚を位置づけることによって、「知性の作家」と呼ばれるムーヅルの文学世界がはらむ知的豊饒さを明らかにしようとする試みである。その際、ムーヅルへのより直接的な影響が推測できる精神史的水脈として、ライブニッツの可能世界論(第2章、第3章)と世紀転換期オーストリアの知的風土(第6章、第7章)を取りあげ、どちらかといえば間接的な影響にとどまるであろうが可能性感覚の成立にとって不可欠だったと思われる精神史的水脈として、近現代のユートピア文学の流れ(第3章、第5章)と世界の複数性の観念(第4章)を取りあげる。なお、それに先だって第1章では、『特性のない男』をユートピア的思惟の位相で概観することによって、可能性感覚の持つ現代的意義について考察する。

第1章「可能性感覚の射程」では、まずはじめに可能性感覚の主要な構成要素として、偶然性の認識・多元主義への傾斜・ユートピア的思惟の三つを抽出する。そのうちの前二者は人工生命の研究や最新の宇宙論にも通底する思惟形式として現代に広く受け入れられているが、ユートピア的思惟はポストモダンの思想状況のなかで死滅しかけている。ポストモダンの「ラディカルな多元主義」は価値の相対化をもたらし、普遍的価値としてのユートピア的なものの存立を許さないからであるが、可能性感覚の持ち主であるウルリヒは、多元主義の立場をとりつつも「正しい生」という倫理的規範を求めてユートピアの探求を行う。それを可能にするのは、ユートピアをひとつの「可能性」と見なす可能性感覚であり、可能性感覚に導かれたウルリヒの実験意識である。可能性感覚は歴史のなかに埋もれたさまざまな想念をユートピアの「可能性」として呼び覚ます。ウルリヒのユートピア探求はその呼び覚まされた「可能性」を発展させ検証する実験であり、その結果そこに「正しい生」の存在が確認されてはじめて、個々の「可能性」は真正のユートピアとして認知されるのである。したがって可能

性感覚の多元主義は、ユートピアの複数性を前提としつつ、それ自体を自己目的化するものではない。じじつ、『特性のない男』における個々の「ユートピア」は同時並列的に存在しているのではなく、ひとつずつウルリヒの検証を受けて次の「ユートピア」へと自己展開をとげていく。だがムーヅルが生前に書いたテキストにおいて、「正しい生」のあり方として承認されたユートピアはない。しかしそれは『特性のない男』が壮大な失敗作だったことを意味するのではない。「正しい生」の在処を実体として突きとめることはできなかったとしても、ムーヅルは長い実験の過程を詳細に記述し、最後に「帰納的志向のユートピア」の構想を提示することによって、精神の無限運動としてのユートピア探求という基本理念を残したのである。

第2章「可能世界論の情景」では、ムーヅルの可能性感覚とライプニッツの可能世界論との関係を考察する。現にあるものは別様でもありうるとする可能性感覚は、通常、現にあるものは別様でないだけの十分な理由があるとする、可能世界論に基づくライプニッツのオプティミズムの裏返しとして理解されている。しかし、神はすべての可能的世界のなかで最善のものを選んでこの世界を創造したとするライプニッツの可能世界論は、その論理の表層をなぞれば、最善世界であるこの現実の成立する根拠を充足理由律に基づき高らかに宣言しているように見えるが、この論理の深層に目を向ければ、現実化されなかった無数の可能的世界を介して、ありえたかもしれぬ別の世界の存在を浮かび上がらせるものとなる。可能世界論の根底にある「すべての可能的なものは存在を要求する」という命題は、他の無数の可能的世界も原理的にはこの世界と同じように成立可能であることを明言することによって、それら無数の可能的世界が存在に向けて押し寄せてくる情景を開示する。一見不動のものに見える現実世界は、その情景のもとで存在の成立以前に引きもとされ、「神は世界を造りながら、この世界は別様でもありうるだろうと考えているのだ」というウルリヒの言葉と共振するものとなる。であれば、可能世界論には、神の正義を証明するというライプニッツの意図とは別に、ユートピア的思惟を生み出す根源的な力が内蔵されているとすることができるであろう。

第3章「生成するユートピア」では、ライプニッツの可能世界論が狭義のユートピア文学とも無縁ではなかったことを、近代ユートピア小説の流れのなかで考察する。神が創造したこの世界になぜ悪が存在するのかという問題との格闘はアウグスティヌスにまで遡るが、ライプニッツはこの問題に可能世界論という論理で答えようとした。最善世界をもたらすために神は悪を容認した、いや、この世界は今ある悪が存在するからこそ最善世界なのだとするその説は、ヴォルテールをはじめ多くの人びとの批判を受けたが、その一方で、ライプニッツのオプティミズムを〈いま・ここ〉にある世界の完全性を保証するものとするのは誤りであり、最善世界は未来の到達目標として完成可能性の位相で語られているとする解釈がある。〈オプティミズムの時間化〉ともいうべきこの解釈のもとで、オプティミズムは最善世界の創出に向かう運動を発動させるユートピア的思惟の母体となるのだが、それと連動するかのようになり、17世紀後半から18世紀にかけてのユートピア小説には、それまでになかった時間のファクターが導入されてくる。ユートピアの生成の過程を克明に語ったヴェラスの『セヴァラン物語』(1677/79)から、生成の途上にあるユートピアをリアルタイムで描いたシュナーベルの『フェルゼンブルク島』(1731-43)を経て、ユートピアをはじめて未来に設定したメルシエの『紀元2440年』(1771)へとという流れのなかで、小説の作者たちはライプニッツとなんらかの関わりを持っており、ライプニッツの可能世界論が文学におけるユートピア的想像力を刺激する力を持ちえていたことを推測させるのである。

第4章「世界の複数性」では、世界の複数性の観念が歴史的に考察され、この観念が18世紀において存在の連鎖の観念と結びついて惑星ユートピア文学を生み出すことを論じる。この地球以外にも知的生物の住む世界は無数にあるという考えは、古代ギリシアの哲学者の頭脳にすでにして胚胎していたが、それは古代ローマのルクレティウスとルキアノスを経て、中世末期のクザヌス、ルネサンス期のブルーノへと受け継がれ、17世紀末にはフォントネルによってヨーロッパ中に広く流布するにいたる。フォントネル以後、18世紀の哲学者たちは地球外知性体の存在を半ば自明のこととして語りはじめ、カントは『天界の一般自然史と理論』(1755)において、太陽系の惑星の住人の精神的能力は太陽からの距離に比例して高くなるという奇妙なテーゼを提出する。このテーゼにしたがえば、ニュートンですら木星や土星の住人から見れば一匹の猿にしかすぎないと見なされるが、このテーゼの成立には存在の連鎖の観念が関わっている。世界の複数性の観念と存在の連鎖の観念が融合することによって、存在の連鎖の宇宙規模への空間的拡大が起これ、宇宙に存在する無数の世界がひとつのヒエラルヒーのなかに組み込まれてしまうのである。その結果18世紀には、惑星にユートピアを設定する文学作品が湧出する。ヴィーラントの『罪なき人びとと世界の相貌』(1755)もそのような惑星ユートピア小説のひとつであるが、宇宙の彼方の星で原罪を知ることなく暮らしている「罪なき人びと」は、卓越した芸術的才能を有しており、かわらと比べれば地球の巨匠

などやはり一匹の猿でしかない。

第5章「SFと異世界」では、ユートピアが20世紀において反ユートピアへと反転するという状況のなかで、ムージルの惑星ユートピアの系譜につながるSF小説を構想していたこと、構想にとどまったその小説の精神を引き継いだのはカネッティであることを論じる。ソヴィエト・ロシアの出現によって20世紀ユートピア文学の主流となった反ユートピア小説のなかであって、ザミャチンの『われら』(1921)はその強烈な諷刺の背後にユートピア的思惟の再生を求める精神をはらんでいた。ムージルの『特性のない男』にもそれと同種の精神を認めることができるが、第2巻で「千年王国」へと収束していく『特性のない男』においては可能性感覚は次第に抑圧されていき、ユートピアの複数性も消滅する。だが『特性のない男』第2巻と並行して構想されていた『惑星エト』においては、それとは対照的にいくつものユートピアが奇想をともなって乱舞しているのを見ることができる。であれば、ムージルは最後まで可能性感覚を手放したのではないだろう。それゆえにムージルは「千年王国」が反ユートピアへと凝固したあとも、それに代わる別のユートピアを構想しえたのだが、書かれずに終わった幻のSF小説の精神はカネッティによって受け継がれ、『人間の地方』(1973)の異世界断章に結実する。

第6章「可能性感覚の誕生」では、ムージルにおけるオーストリア性をマッハとの関係を中心に考察し、学位論文『マッハ学説判定への寄与』(1908)を通して行われたマッハ的思考の受容が『愛の完成』(1911)における可能性感覚の誕生につながっていくことを論じる。世紀転換期のウィーンにあって実証主義の強力な磁場を形成していたマッハから、ムージルは反ドグマ主義的精神とともに、現にあるものを絶対化せず別様であるものを見ようとする精神の視角を獲得する。『マッハ学説判定への寄与』を書くことによって獲得されたこの精神の視角は、『愛の完成』におけるクラウディーネの、現実を虚構と見なす精神の視角へと転位し、クラウディーネに別様でありうる愛のかたちを追求させる。ゆるぎないものと思われていた夫との愛に潜む偶然性を認識し、必然の愛という虚構を解体した果てに広大な可能性の領野を見出すクラウディーネの愛の体験は、必然的真理と思われていた力学的自然観の根底に歴史的偶然を認め、その虚構性を暴くことによって要素の織りなす別様の世界像を見いだしたマッハの思想的営為と、ほぼ同形の軌跡をえがくものとも言える。それは、因果論的な了解を拒み、夢と現実との境界を無効にするマッハの世界に、偶然の支配する悪夢にも似た様相を読みとって戦慄したホーフマンスタールとはまったく異なるマッハ受容のあり方であり、偶然性の認識にユートピア的な別の可能性を産出する契機を認めた『愛の完成』は、それによって可能性感覚の誕生を告げるムージル文学の原基的作品となったのである。

第7章「存在しない対象」では、オーストリアの知的風土との関連で、マイノングの対象論とムージルの可能性感覚との関係を考察する。『マッハ学説判定への寄与』によって哲学博士となったムージルはグラーツ大学のマイノングに助手として招聘されるが、逡巡した後その申し出を断る。この決断によってムージルは作家の道を歩きはじめるのであるが、マイノングとの関係はただそれだけのエピソードでは終わらなかった。「黄金の山」や「まるい四角」といった現実には存在しない対象を、実在する対象と並んで思惟の対象にしようとするマイノングの対象論は、形而上学にしみついた「現実的なものを優遇する偏見」から脱出し、人間の本性に組み込まれている「現実的なものに対する並はずれた関心」を払拭して、「非現実的なものについての知」を構築しようとするその姿勢において、ムージルの可能性感覚と共振するのである。マイノングの対象論についてラッセルは、その「現実感覚」の欠如を批判したが、逆にいえば、これはマイノングが「存在するものを存在しないものよりも重要視しない」可能性感覚の哲学者だということを意味しているだろう。また、マイノングの現実感覚の欠如について、それをオーストリア人の特性に帰す見解もあるが、だとすれば、マイノングとムージルを結ぶ線はオーストリア固有の知的水脈につながるものでもあるだろう。

論文審査の結果の要旨

1930年代前半に第3部の途中までが発表されたまま、未完に終わったオーストリアの作家ローベルト・ムージル(Robert Musil 1880-1942)の長編小説『特性のない男』は、今日ではすでに、トーマス・マンの『魔の山』、アルフレート・デーブリンの『ベルリーン・アレクサンダー広場』、ヘルマン・ブロッホの『夢遊の人びと』などと並んで、ドイツ文学のいわば「古典的な現代小説」の一つと見なされるほどの評価を得ている。しかし、小説そのものが未完に終わったうえに、続稿に関わるかなりの量の断片や草稿メモなどが残されていることもあって、この作品の内包する種々の問題については、まだ解明されていない点が多く、現在なお各国の研究者たちによって、さまざまな視点からの研究が活発に行なわれている。

本論文は、『特性のない男』の最も重要なキーワードの一つである「可能性感覚」の問題を多角的に考察した、きわめて意

欲的な労作である。といっても、本論文は、このキーワードを手がかりにして『特性のない男』という小説自体を分析することを旨とするのではない。論者は、この小説の主人公ウルリヒがもっている「可能性感覚」なるものを「現にあるものを別様でもありうるものと見なし、現実の背後に可能性として潜在する無数の世界を呼び起こすことによって、現実という固定した枠組みからの超出を促す意識感覚ないし思考能力のこと」として捉え、そのような意識感覚や思考能力が決して現代作家ムージルにおいて突発的に出現したものではなく、ヨーロッパの精神史に深く根ざしたものであることを明らかにすることを本論文の第一の課題としている。そのさいに論者は、この小説の主人公が17世紀後半から18世紀初頭にかけて活躍したドイツの哲学者ライプニッツに対してとるアンビヴァレントな態度を手がかりにして、ライプニッツの可能世界論についての考察から出発し、主として17、18世紀のドイツの哲学者や文学者のさまざまな著作の中に、現実世界とは異なる種々の可能世界を喚起する試みのあとを探索する。そして、このように（部分的には古代や中世をも視野に入れて）、ムージルの「可能性感覚」に連なるヨーロッパの知的伝統を跡づけたうえで、論者は、本論文の第二の課題である、ムージルと同時代にオーストリアもしくはその周辺で活躍したホーフマンスタール、カネッティなどの文学者や、マッハ、マイノングなどの哲学者たちの著作とムージルの「可能性感覚」との関係を究明する作業を行なっている。すなわち、論者は、これら二つの課題に取り組むことによって、ムージルの「可能性感覚」を通時的観点と共時的観点との両面から、ヨーロッパの、とりわけ中部ヨーロッパの精神史の中に位置づけることに成功している。

本論文の最も評価されるべき点は、鋭い問題意識に支えられた大胆な仮説提示と、自由闊達な思考に基づく学際性の発揮によって、ややもすれば狭い固定的な枠組みの中での作業に終始しがちな従来のゲルマニスティクの殻を破って、一人の現代作家の一つの長編小説の提起する問題を通時的にも共時的にも広大にわたるヨーロッパの精神世界の中に据え直してみせた点にある。従来のドイツ文学史においてはもっぱらヴォルフをへてゴットシェット、ボードマー、レッシングへと連なる18世紀ドイツの啓蒙主義美学の系列の上でのみ論じられがちであったライプニッツの思索を、その可能世界論を足場に、フランスのドニ・ヴェラスの『セヴァラン物語』などをも介在させながら、当時のドイツの代表的なユートピア小説であるシュナーベルの『フェルゼンブルク島』と関連づけていく第2章や第3章、あるいは、一方では古代ローマのルクレティウスやルキアノスの壮大で奔放な宇宙イメージを、他方では19世紀末から20世紀にかけて人気の文学ジャンルとなったSF（サイエンス・フィクション）を視野に入れたうえで、カントやヴィーランドなど18世紀ドイツの哲学者や文学者が描いたETI（地球外知性体）のイメージを自在に紹介しながら、「世界の複数性」という思考の歴史を跡づけていく第4章などは、むしろ細部において論証の強引さや曖昧さを指摘することはできるにしても、ドイツ文学研究の新しい可能性を探求する果敢な試みとして、積極的に評価されるべきであろう。

論者の研究がいたずらに奇を衒い、大風呂敷を拡げる類いのものでないことは、ムージルの「可能性感覚」を共時的な観点から捉えようと試みる第5章、第6章、第7章に見られるムージル研究者としての実証的姿勢がよく示している。すなわち、論者は、たとえば第5章第3節においては、ムージルの日記やメモなどを丹念に読み解く作業を介して、これまで研究者たちにほとんど無視されてきた『南極の国』もしくは『惑星エト』と題するムージルのSF小説構想を掘り起こし、このSF小説構想が彼の「可能性感覚」との関連においてもつ意義を考察する。また、第6章においては、ムージルが若いころに書いた学位論文にまで遡って、彼がエルンスト・マッハの哲学から受けた影響を分析し、あわせて、ムージルが世紀転換期のオーストリア文化圏において占める独自の位置を確定しようと努めている。本論文の独特な学術的価値は、先述のようなスケールの大きい精神的展望と、今述べた堅実で実証的な作家研究とが巧みに合体されているところにあると言える。

もちろん、本論文にも問題点はいくつかある。たとえば、ライプニッツの可能世界論やシュナーベルのユートピア小説についての論者の解釈は、現代作家ムージルの小説や彼の「可能性感覚」に触発された論者自身の問題意識にいささか引きつけられすぎてはいはないかという懸念がある。あるいは、ムージルの文学とアレクシウス・マイノングの哲学との親縁性については、もう少し綿密な論証が必要なのではないかと思われる。

しかし、こういったいくつかの難点も、本論文が全体としてもつ学術的価値を否定するものではない。

以上審査したところにより、本論文は博士（文学）の学位論文として価値あるものと認められる。2000年3月4日、調査委員3名が論文内容とそれに関連した事柄について口頭試問を行なった結果、合格と認めた。